

# 小中一貫教育で子どもの生きる力をはぐくむ学校経営

長期研修員 福井 敏夫

Fukui Toshio

## 要 旨

置籍校のある上北山村にとって、少子化への取組は急務であり、村の教育委員会や学校は、小中学校が協働体制で教育に当たる必要があるという認識に立ち、小中一貫教育の研究を始めようとしている。本研究では、へき地小規模校が抱える課題と向き合い小中一貫教育を通じた学校経営にどう取り組むか、有効な教育活動や組織・運営の在り方について基本構想を立て考察を行った。

キーワード： 少子化問題、小中学校教員の交流連携、村の特色を生かした学校づくり

## 1 はじめに

変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちには、「生きる力」をはぐくむことが必要である。そして、その目標達成のために、小中高の緩やかな接続を含め長いスパンで子どもたちを育てる一貫教育が提唱され、全国的に実施校が増えている。置籍校のある上北山村でも、少子化による教育への深刻な影響を克服するための方策として小中一貫教育を実施する方向である。そこで、本村でどのような学校づくりをしていくべきか、同じ課題をもつ学校の実践に学びながら考察を行った。

## 2 研究目的

小中一貫教育を通して、上北山村の子どもたちの生きる力を育てる学校経営の在り方を研究する。

## 3 研究方法

小中一貫教育により学校を活性化させる経営の在り方について、先進校視察や先行文献を通して研究し、置籍校の小中一貫化を想定した構想を立て考察する。

## 4 研究内容

### (1) 上北山村の現状

#### ア 村の学校の現状

上北山村は他の市町村と比べ人口が減り、少子高齢化が進んでいる。人口の減少が加速しているのは、特に親の世代が職を求めて都会に出ていくことが要因となっている。上北山小学校の今年度の児童数は26名で、数年前から複式学級が実施されている。上北山中学校も今年度の生徒数は11名である。生徒数の減少により、平成21年度から中学校の養護教諭が配置されない予定だが、思春期に入り精神的ケアの必要な年齢を迎えている生徒にとって養護教

論の不在は大きく深刻な問題である。

小中学校の交流については、両校が約2km離れているため、移動のロスタイムが多く、提案されてもなかなか実現できずにいる。しかし、運動会についてはかなり以前から、小学校を会場に保育園、小中学校、村体育協会が合同で開催してきた。恒例行事の「村民運動会」として多くの村民の参加を得て、子どもたちの頑張りを盛り上げていこうというものであり、そこには地域が学校を支えていることを実感できる光景がある。また、本年度新たに小学校の学習発表会と中学校の文化祭が統合して開催された。多くの村民の出席を得て、小中学校が一体となった雰囲気を感じる大変な盛り上がりを見せた催しとなった。両校が小中学校の交流促進に積極的に取り組もうとしている姿勢が現れていた。

一方、本村でも少子化や財政上の問題から学校の小規模化を検討している。2年前に中学校の敷地内に小学校を移す併設案があがり、教育委員会は具現化に向けた取組を始めている。

## イ 子どもの実態

本村の子どもたちは、少人数ということで、家族的な雰囲気の中でのびのびと育ち、性格も素朴で朗らかである。小規模校のメリットとして、教員の目が一人一人に十分行き届いているといえる。しかし、小さな村で、ふだんからよく知り合っていることもあり、中学校進学時の特別な緊張感はほとんどないといってよい。気心の知れた者同士の生活が対人関係を固定化させ、俗に言う人見知りの傾向をもたらしていることは否めない。また、家庭・地域での生活でも、恵まれた自然環境がありながら、内遊びが多くなる傾向にある。

## ウ 地域・保護者の願い

本村では保護者世代の都市部への流出による過疎化や少子高齢化が大きな課題となっており、子育てにおける地域の連携や魅力ある学校づくりに期待が寄せられている。また、保育園から中学校までの十数年間を同じクラスで学ぶ子どもたちに、互いに切磋琢磨するための自信や向上心、及び将来自立した社会人になるためのたくましさを育てて欲しいと願っている。同時に、小学校での複式学級という現実を受け止めながらも、学力についての不安ももっている。

### (2) 地域住民・保護者のコンセンサスを得る小中一貫教育を

小中一貫教育によって、本村が抱えている教育課題を改善する多様な取組が進められるビジョンを示すことで、地域住民、保護者のコンセンサスを得ていきたいと考える。

## ア 地域の課題について

共同体として横のつながりが強い小さい村であっても、保護者にとって相談できる同世代の人が少ない中での子育ての不安は大きい。子育て支援のためにも学校・地域が一体となって教育にかかわる環境づくりが急務である。

子どもたちの生きる力をはぐくむためには、学校・家庭・地域が相互に連携しつつ、社会全体で育てていくことができるシステムづくりが重要である。そのため、異年齢の子どもや世代を超えた地域の人々とのかかわりの中で、様々な体験の機会を提供し、子どもの自主性・創造性・社会性を涵養するとともに、触れる、体験するといった感覚を通して情操を養うなど、学校と地域の大人の力を結集して子どもを育てる環境を整備していくことが求められる。小中学校ごとの地域連携ではなく、小中学校が「一つの学校・一つの地域」と考え、地域住民の学校運営への参画や学校から地域への働きかけを通して、教育ネットワークを築き、その中心に学校を位置付け、学校が地域コミュニティの中核とした役割を担う必要がある。

その取組の中で、小中学校PTAを融合させ、思いを共有するための保護者の交流の場を広げたり、子どもの教育のために地域諸機関との連携を強化したりするなど、学校・地域が一体となって教育に携わることができる地域づくりを進めていくことで、保護者の願いに応えるものであると考える。

## イ 学力の課題について

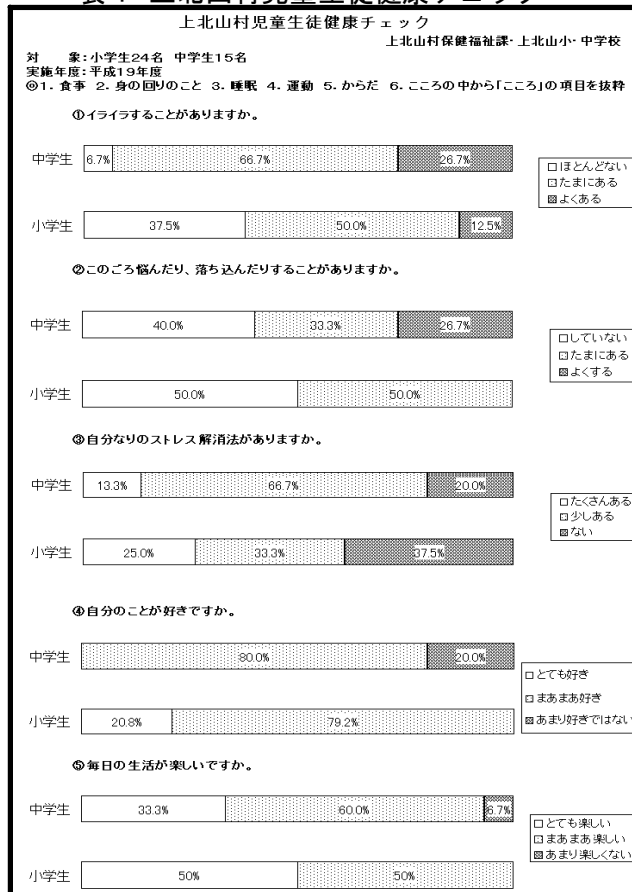
村としては、加速する少子化により余儀なくされた小学校の複式学級という現状が大きな問題である。学校評価にかかわる保護者向けアンケートの中に、「複式の授業で十分な学力が保障されるのか不安である」という意見が寄せられている。教員の側にしても複式の授業を受けもった場合、一つの学年に説明を行っている間は、もう一つの学年は自習ということになる。自習をさせている学年にもきちんと課題に取り組んでいるか目を配る必要があり、両学年ともに効率のよい、目が行き届いた授業をするのは大変なエネルギーを要する。教員の力量によっては全く違う授業風景になってしまうのである。この現状を何とか改善できる手立てがほしいと願っているのは、学校も保護者も同じである。全国的にみると、上北山村と同じ事情の村では、小中連携や小中一貫教育を推進し、教員の相互乗り入れ授業を実施している学校の例は多く、例えば、山口県周南市や岡山県津山市、鹿児島県の口之島等の小中連携の取組などに見ることができる。それらの学校では、複式の授業を少しでも解消するために、中学校教員が小学校に教科担当として入り授業を行っている。本村としても、小中学校が連携し9年間を見通した教育に取り組むとともに、村内外の多くの関係機関の協力を得た多様な教育活動を展開していくことで、子どもたちの学力を保障するよりよい方向を見出していけるものと考えている。

## ウ 生徒指導の課題について（表1）

本村では、近年、生徒指導にかかわる表面化した問題はほとんどない。1学級の児童生徒数が10名不足らずで、教員が生徒一人一人についてよく観察し、声かけをしていること、そして、学校と家庭が連絡を取り合っていること、また、一人一人の顔が分かる小さな村で、子どもの行動に対し、常に地域の人々が見守っていることなどがその要因として挙げられる。しかし、多くの大人に見守られている環境とはいえ、思春期における心の問題はどの子にも多かれ少なかれ生じてくる。

村の調査では、特に中学生に、内面的なストレスを感じている子どもが少なくないという結果が出ている。中学校では、生徒が思春期に入る上に、少人数で固定化、序列化が進んだ人間関係の中で、自尊感情が抑えられること

表1 上北山村児童生徒健康チェック



に起因するものと分析している。コミュニケーションをうまくとれない生徒や自信をなくした生徒が、奮起しにくい、活力を取り戻しにくい状況があるのではないだろうか。田舎であるから都会の学校のような問題事象は起こらないとは言い切れない。危機管理としてどんな事態をも想定しておく必要がある。仮に子どもが潜在的に抱えているストレスがいじめ等の問題行動に顕在化した場合、小規模校だけに特に、被害者の逃げ場のない状況が生まれかねない。子どもの成長は個々に大きな差異がある。心の安定を保ち、建設的な方向に向かわせるためには、小中学校9年間の中で一人一人の心と体の成長を見続け、年齢差のある子どもたちの交流やボランティア活動を進めるなど、必要な精神的ケアなどを行っていくことが求められる。課題によっては学校・家庭・地域が今以上に一体となって取り組むことが大切となる。小中学校協働体制で取り組む一貫教育では、小中全教師が児童生徒個々の実態を見守り、発達段階に応じた指導の在り方を共有することができるようになり、心の問題を含めた様々な子どもの抱える課題について適切な指導が行っていけるものとする。

### (3) 上北山村における小中一貫教育推進基本構想

#### ア 小中一貫教育推進の基本方針

(ア) 子どもの生きる力を育てる学校づくり
a 豊かな自然や人々のつながりを通して、地域の課題に取り組み、郷土を愛し誇りをもってたくましく生きる子どもの育成
b 小中連携による教員の授業力等の資質の向上
(イ) 学校の主体性・自律性の発揮と教育委員会のサポート体制の充実
(ウ) 学校・家庭・地域の連携を強化・充実する教育の推進

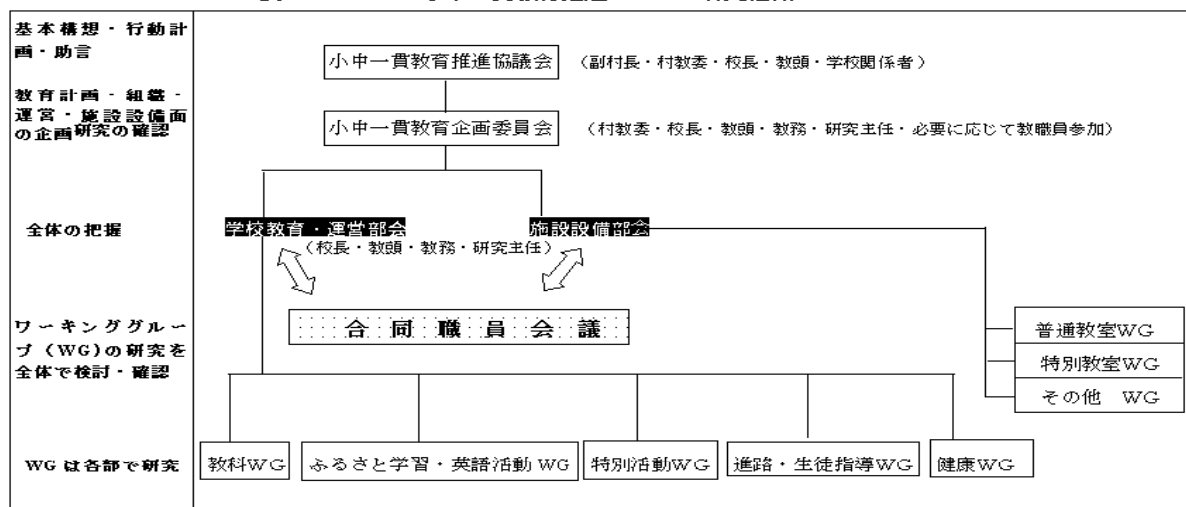
#### イ 小中一貫教育推進年次目標（表2）

表2 小中一貫教育推進年次計画

実施前年次 短期的目標	1年次～2年次 中期的目標	3年次以降 長期的目標
小中一貫教育推進委員会の設置 重点項目・行動計画の策定 授業交流・合同研修の実施 児童生徒の交流促進 連携協力内容の研究	組織・運営体制の確立 企画会議・ワーキング会議の定期開催 学校行事の合同開催等、連携教育の研究	9年間のカリキュラム編成の研究 小中一体となった教育の推進
<b>具 体 項 目</b>		
実施前年次	1年次～2年次	3年次以降
小中合同会議・研修会	合同職員会議・職員研修を定期的に開催(情報の共有・具体項目実施後の評価・改善)	
小中教師の相互乗り入れの検討・試行 (出前授業・総合的学習の支援等) 小学校一部教科担任制の研究	小学校の一部教科担任制実施(高学年中心) 小学校英語活動計画・小学校教師の英語指導研修会 中学校の授業・部活動に小学校教師が支援	
小学生の部活動・生徒会活動見学	小学校高学年の部活動への希望参加	
合同開催の可能な行事の検討 日課表・年間行事計画の摺り合わせ	行事の合同開催・日課表・週時程表の作成の実施 異年齢集団の交流活動計画作成・実施	
生徒指導に関する情報の共有化確認	一貫性ある生徒指導基本構想の検討 生徒指導年間指導計画作成	
		小中一貫学習評価の研究
特別支援教育の共通認識	要支援児童生徒の情報の共有化と一貫性ある指導	

## ウ 小中一貫教育推進のための研究組織（表3）

表3 小中一貫教育推進のための研究組織



## エ 上北山村小中一貫教育の概要

### (7) 究極の連携を目指す小中一貫教育

本村は、教育特区や研究開発校を受けての小中一貫教育ではなく、当面現行法体系の枠内での改革を目指している。その場合、学習指導要領に準拠しながらの小中連携を意味するのが一般的であるが、連携ではややもすると小中交流の域から抜け出せない場合があると考え、小中学校が一貫性をもった教育を目指し、相互理解に基づき指導内容や指導方法を共有しながら系統性、継続性を追究していく意味からも、あえて小中一貫教育という表現を用いていきたいと考えた。

しかし、小中一貫カリキュラムの編成作業に於いては、学習指導要領の趣旨の下での一定の乖離<sup>かいり</sup>が発生する可能性があり、整合性をチェックしながら漏れ落ちや過度の重複が起きないように留意し、カリキュラムを作成することとした。

### (イ) 小中一貫教育課程の編成

「小中一貫教育推進の基本方針」を受けて、子どもたちの生きる力を育てる魅力ある学校づくりのための教育課程編成に当たって三つの柱を設定した。

- ①地域の課題に取り組み、つながりと温もりのある学校～郷土を愛し誇りに思う子～
- ②基礎基本を確実に身に付ける学習環境
- ③豊かな感性とたくましさをもつ北山っ子

#### a 上北山村独自の学習内容の開発と9年間の系統的・継続的な学習指導

##### ○ 系統性、継続性のある指導内容、指導方法の工夫

各教科、領域において9年間を見通した指導内容の系統表を作成するなど、基礎学力の定着を図り、さらに活用する力を身につけさせる系統的な指導内容を研究していく。また、小中学校の緩やかな接続のための学習規律や指導方法の一貫性を目指すとともに異年齢交流を図るための学校行事の合同開催、合同学習を積極的に計画していく。

##### ○ 上北山村の特色を生かした「ふるさと学習」

魅力ある学校づくりのための三つの柱の一つである「地域の課題に取り組み、つなが

りと温もりのある学校～郷土を愛し誇りに思う子～」の実現のために、本村の特色を生かした「ふるさと学習」をカリキュラムに位置づけていく。あくまで学習指導要領の枠内での計画であり、全体の授業時数との関連で、新しい教科として創設するのではなく、総合的な学習の時間を軸にした学習とし、教科横断的に展開していきたいと考えている。

本村は、自然に恵まれ、歴史的価値の高い年中行事も多い。また、小さい村であることから村民としてのまとまりがあり、学校教育への関心も高く協力的である。このことから地域の人々や関係諸機関と緊密な連携を取り、地域の人材を活用することで、自然や地域社会を生かした独自の学習が展開できる環境にあるといえる。これまでも、環境省の協力を得ての大台ヶ原の動植物を調べる自然環境学習や村の歴史研究家の指導を受けての大峯奥駈道をたどる歴史学習、また、北山川の生物や川の源流を探る学習、保育園児や高齢者との交流など、小中学校でそれぞれ総合的な学習を中心に様々な実践がなされてきた。

小中一貫教育推進に当たり、これまでの小中学校の実践を財産として系統的に組み立てていくとともに、新しく本村の自然や文化を教材化していき、地域の支援を受けながら多様な学習を展開していく。また、「ふるさと学習」は、総合的な学習の時間だけでなく、各教科・領域においても地域素材の教材化を積極的に研究するなど、郷土を知り郷土を愛する子どもの育成を目指して、全教育活動の中で展開していきたいと考えている。

#### ○ 国際理解教育・情報教育を通しての社会性の育成

本村のようなへき地小規模校にとって、子どもたちの社会性の育成は重要な課題であり、その手立てとして、国際理解教育及び情報教育に力を入れていきたい。

まず人間関係を広げる活動として他町村の小中学生との交流から始めたい。「ふるさと学習」で学んだ成果を情報機器を活用しながら他の学校に発信し交流を進めていく。さらに価値観の多様性を知る学習として外国の人々との交流を進めていく。ALTから異文化を学ぶだけでなく、我が国や奈良県を訪問される外国人を招いての交流会やインターネットを活用した海外との交流などによって、外国の言語や文化に対する理解を深め、進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を育て、子どもたちが交流の場を積極的に求める意欲や態度につなげていきたい。

また、小学校段階から英語に触れさせていくことは、コミュニケーション能力や表現力を育てる上でも、国際理解を深める上でも大変重要な体験となる。世界の共通語としての英語を中心とした外国語活動は、その重要性から今回の学習指導要領改訂により小学校高学年での必修活動となる。本村でも、国際理解教育としての小学校の外国語活動を重視し、教員集団の共通理解を図りながら、ALTや中学校の英語担当教員の協力を得て、低学年から身近な英語に親しませていく全校的な活動計画を立てていく。同時に、小学校教員の外国語活動指導力向上のための研修会も積極的に実施していきたいと考えている。

#### ○ 小中学校教員の相互乗り入れ授業の実施

小学校高学年の社会科・理科などの教科で中学校教員による一部教科担任制を実施していきたい。中学校教員の指導によって専門性を活かした授業ができ、同時に複式授業の解消にもつなげられると考える。さらに、小学校高学年で教科担任制を経験すること

により中学校の授業形態への滑らかな移行を図ることができる。と考える。

また、小学校教員が中学校の授業にT・Tとして参加したり、教育相談、特別支援教育等の支援をすることで、個に応じたきめ細やかな指導が可能となり、学習面や生活面の指導効果を上げることができる。小中学校教員の交流によって、子どもたちも多くの教師とかかわりを持ち、ふれあいの中から多くのことを学ぶことが期待できる。

#### **b 学習評価の一貫性・系統性**

東京都品川区の小中一貫校「日野学園」では、当然のことながら開校時から9年間の一貫した通知表を用いている。子どもたちが「目指す児童・生徒像」に近づくことができたか、子どもたちに付けたい力が付いてきたかなど、9年間の学習面や生活面の子どもの変容を把握し一貫性ある評価をしていく必要がある。小中学校が連携し系統的な指導内容・指導方法の工夫・改善の研究と9年間の一貫した学習評価の在り方についての研究とは一対のものと認識しなければならない。

#### **c 異年齢集団の交流活動**

異年齢集団の交流活動において、年齢の近い子どもたちの交流の場合、上級生が力を発揮できずグループをまとめきれなかったり、逆転現象を起こし上級生が意欲をなくすことがよくある。一方、小中学生のように大きく年齢が離れた子どもたちの交流が規範意識や自尊感情の形成に効果的であるという研究結果も出ている。年上の子どもは信頼されているという実感を持ち、年下の子どもは先輩の力に尊敬の念と自らの目標をもつことができるという相乗効果が期待できるのである。

ここで提案したいのは、放課後に行われる中学校の部活動に小学校高学年から自主的に参加できるようにするというものである。これは小中学生が共に学べる環境の中で、放課後の時間を有効に活用して、スポーツや文化活動を通して健全に過ごすというねらいである。この活動によって向上心や友情、規範意識、克己の精神、自尊感情を育てていきたいと考えている。

また、村では毎年村民の参加を募り、大台ヶ原クリーンキャンペーンやヒルクライム大台ヶ原(since2001)などのイベントを催している。土、日曜日のことでもあり、あくまで自主的参加であるが、児童会や生徒会を中心に積極的に参加を呼びかけ、社会貢献の精神を培う社会参加体験活動として取り組んでいきたいと考える。

#### **(ウ) 授業力等の資質の向上のための研修**

小中学校教員が一貫教育の趣旨を理解し、互いに学び合う姿勢をもつことが授業力の向上につながっていくと考える。合同授業や交換授業などの実践を通じての授業研究を行うことによって、よい刺激を受け、互いのよさを今後の指導に生かしていけるようになる。同時に小中学校の指導内容の系統性についても把握することができることから、学習でのつまづきの原因や繰り返し指導の必要な内容などを確認し合い、指導方法を共有していけるものと考ええる。

#### **(イ) 小中一貫教育推進のためのシステム・組織の構築**

##### **a 教育計画の一元化**

小中一貫教育を進める上で、校務の一元化、指導内容の一貫性を図るための合冊の教育計画書を作成することで、系統性がより分かりやすくなる。

・学校教育統括編……教育目標・重点課題・年間行事・校務分掌等

- ・教科教育編 ……各教科の学習系統表と各学年年間指導計画
- ・教科外教育編 ……道徳教育その他の教科外教育の年間指導計画

#### **b 管理・運営にかかわるハード面の整備**

広島県呉市の実践では、実際の学校運営や施設設備の管理において、小中学校が併設される中で効率的な運営を行っていくためには、ハード面・ソフト面両方のシステムの整備が必要になってくることが述べられている。

ハード面だけでも日課表・週時程表・年間計画表・研究組織・校内組織等多岐にわたるが、子どもたちが異なる授業時間等のカリキュラムの中でも支障なく過ごせる環境をつくり、管理、運営面で教員集団が動きやすい組織を工夫していくために、まず手がけなければならない。例えば、小中学校合同での活動をする場合、混乱を来さないために日課・週時程表をある程度統一したものにしておく必要がある。また、管理・運営組織を見直し合理化していく場合に、両校のよい点を取り入れるとともに、特に指示系統が混乱することのないよう機能的な流れを作らなければならない。

#### **c 合同開催の行事や研修会の時間確保**

小中学校の交流を促進する上で、学校行事の合同開催はまず初めに取り組みられるものである。その意義や日程、持ち方等を十分検討し、1年間の多くの学校行事の中で、合同開催が可能なものから積極的に実施していく。一方、合同研修については、小中学校単位での会議研修計画があったり、小学校の授業準備時間や中学校の部活動の関係から、放課後に時間を確保し同一日に会合をもつことは大変難しい。合同開催する学校行事や会議、研修会等については、前年度末の会議で最優先させて年間行事予定に位置付けていき、夏期休業中の開催も考えていく。

#### **d P T Aの統合**

へき地の小規模校では学校行事など様々な場面で保護者の出番が多くなる。教員や児童生徒の数が少ないことから、保護者の協力を得なければ成り立たないという事情があるからである。また、小中両校P T Aを兼ねている保護者が多いことから、両校それぞれで開催されるP T A総会や研修会等、出席しなければならない会合も当然多くなり、これまでできるだけ同じ者が小中P T A役員を兼ねることのないように相談し工夫してきた経緯がある。

しかし、子どもの数が減少してきた現状では当然家庭数も減り、体制を維持するために両校P T A役員を兼ねるか組織の見直しを図るかの選択が迫られている。小中一貫教育と並行して計画されている小中学校併設を機に、小中P T Aを統合して会合や行事などを整理し、合理化していくことが望ましいと考える。

#### **e 学校評価システムが機能する学校**

学校が子どもや保護者、地域の人々の信頼に応え、家庭や地域社会と連携・協力して教育活動を展開していくためには、情報を積極的に発信し、説明責任を果たすことが重要である。また、教育の質を向上させていくためには、学校運営・学校教育活動全般にわたって、P D C Aを機能させていくことが必要である。小中一貫教育を進め新しい試みが多くなる中で、子どもや保護者、地域の人々からの評価を真摯<sup>しんし</sup>に受け止めて学校の課題を共有することにより、家庭や地域社会との連携・協力を得た学校づくりが可能となり、学校の教育力の向上につながるものとする。



また、学校として短・中・長期的目標に対して教員個々が常に点検し、取組の充実を図るための現状把握チェックリストが必要であると考え、大阪府吹田市の取組を参考に次のような表を作成した。(表4)

**表4 小中一貫教育チェックリスト**

<p><b>小中連携</b></p> <p>↓</p> <p><b>小中一貫</b></p>	<p><b>学習指導</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 授業交換</li> <li><input type="checkbox"/> 出前授業</li> <li><input type="checkbox"/> 授業体験</li> <li><input type="checkbox"/> 授業公開</li> <li><input type="checkbox"/> 合同研修会(随時、年1、2回)</li> <li><input type="checkbox"/> 授業研究</li> <li><input type="checkbox"/> 評価研究</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> <li><input type="checkbox"/> 学力実態把握</li> <li><input type="checkbox"/> 教科担任制</li> <li><input type="checkbox"/> 学習内容の情報交換</li> <li><input type="checkbox"/> 人材バンクの設置</li> </ul>	<p><b>生徒指導・特別支援教育</b></p> <p><b>生徒指導合同研修会</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> しじめ・不登校</li> <li><input type="checkbox"/> 小らと中一担任の引き継ぎ</li> <li><input type="checkbox"/> 子どもの実態交流会</li> <li><input type="checkbox"/> 中学校生徒担当指導主事派遣研修</li> </ul> <p><b>特別支援教育の推進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 在籍児童の実態交流・小中引き継ぎ</li> <li><input type="checkbox"/> 教材・教具の共有・引き継ぎ</li> <li><input type="checkbox"/> 進路関係の合同研修</li> <li><input type="checkbox"/> 相互授業公開</li> </ul>	<p><b>学校行事・児童会・生徒会・部活動</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 合同開催行事後討</li> <li><input type="checkbox"/> 運動会・文化祭</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> <li><input type="checkbox"/> 児童会生徒会交流</li> <li><input type="checkbox"/> 体験交流</li> <li><input type="checkbox"/> 異年齢集団交流活動</li> <li><input type="checkbox"/> 縦割り活動(清掃・栽培取組等)</li> <li><input type="checkbox"/> 集会活動</li> <li><input type="checkbox"/> 部活動交流</li> <li><input type="checkbox"/> 部活動見学</li> <li><input type="checkbox"/> 部活動体験</li> </ul>	<p><b>学校運営・組織・教員の交流</b></p> <p><b>奈良県教育週間期間中の学校公開を共通日程で開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 管理職の交流</li> <li><input type="checkbox"/> 教職員の交流</li> <li><input type="checkbox"/> 合同授業研究</li> <li><input type="checkbox"/> レクリエーション/スポーツ</li> <li><input type="checkbox"/> 学校・家庭・地域の連携</li> <li><input type="checkbox"/> PTAの一元化</li> <li><input type="checkbox"/> 小中一貫教育推進協議会編成</li> <li><input type="checkbox"/> 合同での先進校・研究会等の視察研修</li> <li><input type="checkbox"/> 学校事務の機能化・効率化の研究</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul>
	<p><b>9年間のカリキュラム編成</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 国語</li> <li><input type="checkbox"/> 算数・数学</li> <li><input type="checkbox"/> 理科</li> <li><input type="checkbox"/> 英語活動・英語</li> <li><input type="checkbox"/> 情報教育</li> <li><input type="checkbox"/> 総合的な学習</li> <li><input type="checkbox"/> 授業交流</li> <li><input type="checkbox"/> 合同授業</li> <li><input type="checkbox"/> 業務教員による授業</li> <li><input type="checkbox"/> 合同研修会(定期開催)</li> <li><input type="checkbox"/> 授業研究</li> <li><input type="checkbox"/> 評価研究</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> <li><input type="checkbox"/> 学力実態把握</li> <li><input type="checkbox"/> 「ふるさと学習」指導内容の体系化</li> <li><input type="checkbox"/> 人材バンクの設置</li> </ul>	<p><b>一貫性ある生徒指導体制への改善</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 問題対応の合同会議</li> <li><input type="checkbox"/> 情報・行動連携</li> <li><input type="checkbox"/> データの一元化</li> <li><input type="checkbox"/> 合同パトロール</li> <li><input type="checkbox"/> 進路指導合同会議</li> <li><input type="checkbox"/> キャリア教育9年間の計画作成</li> </ul> <p><b>特別支援教育の推進</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 合同授業</li> <li><input type="checkbox"/> 校内体制の改善</li> </ul>	<p><b>学校行事合同開催</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 運動会・文化祭・入学式・卒業式など</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> <li><input type="checkbox"/> 部活動交流</li> <li><input type="checkbox"/> 中学生による技術指導</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> <li><input type="checkbox"/> 地域行事への参加を通じた交流</li> <li><input type="checkbox"/> 教職員の参加</li> <li><input type="checkbox"/> 児童生徒の参加促進</li> </ul>	<p><b>9力年を一体と捉えた実践</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li><input type="checkbox"/> 小学生の中学校体験</li> <li><input type="checkbox"/> 9年間のカレンダー作成</li> <li><input type="checkbox"/> 小中の人事交流</li> <li><input type="checkbox"/> 業務発令・教科担任制</li> <li><input type="checkbox"/> TT等の協働体制</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> <li><input type="checkbox"/> 組織・運営体制の確立</li> <li><input type="checkbox"/> 定期的な合同会議</li> <li><input type="checkbox"/> 合同企画推進委員会編成</li> <li><input type="checkbox"/> 日課表・時間割の調整</li> <li><input type="checkbox"/> 学校・家庭・地域の連携</li> <li><input type="checkbox"/> PTAの一元化</li> <li><input type="checkbox"/> 小中一貫教育推進協議会</li> <li><input type="checkbox"/> 学校事務の機能化・効率化の研究</li> <li><input type="checkbox"/> その他</li> </ul>

吹田市小中一貫教育実施チェックリスト参考

#### f 学校事務機能の効率化・組織化

教員集団が小中一貫教育の推進に力を注げるように、事務処理機能の効率化を図ることが必要になってくる。まず新しい教育課題に取り組む環境づくりとして、既存の学校事務内容を整理し、小中学校の事務業務の組織化・合理化を進めることが必要である。そして、情報の共有化のためにデジタル化を進めLAN等を整備するなど、課題への対応や教育活動の活性化に有機的に迅速に機能する学校事務体制を作る必要がある。

#### g 職員室の統合

小中学校教員全員が共通認識をもつための合同会議や日々の細かな打合せなど、職員室が分かれていると不都合な面が多く生じてくる。教職員が意思の疎通を図り、子どもの発達段階に応じた指導の方法を理解し合い思いを共有するという点や、小さな連絡の積み重ねが誤解を防ぎ、大きな信頼関係を作り出すという点からも、是非職員室を一室にすることを望む。

### 5 まとめと今後の課題

基本構想を基に様々な教育活動を挙げてきたが、小中学校が一体となって、系統的、継続的に進める小中一貫教育は、本村の抱える課題の克服のために有効に働き、郷土を愛し誇りがもてるたくましい子どもの育成を実現できるものである。合同授業や合同行事などの交流活動を通して、新しくより発展させた教育活動が展開できる可能性も見えてきた。小中学校併設が迫っている本村にとって、小中一貫教育への取組のよい機会ととらえるとともに、連携に留まることなく小中一貫教育まで発展させていく研究の継続と追究を目指したいと考える。

しかし、本村の取組はスタートラインに立ったばかりであり、まだまだ手探りの状態である。軌道に乗せていくために、今後予想される次のような課題についても、その手立てを考えていく必要がある。

#### (1) 学校文化の違いという高いハードルをクリアするための小中学校教員の協働体制の構築

小中学校の交流により小中連携、一貫教育を実施することにより、小中学校間に存在する多くの課題が解決されると言われている。学校文化の違いというハードルは高いが、協働体制を築くための人間関係づくりに努めていくことが大切である。

## (2) 新しい統合文化の創造と両校の築き上げてきた文化のスリム化

両校それぞれに築き上げてきた学校文化を削いでいくことは大変な作業である。新しい学校を創造するという認識に立って思い切ったスリム化を図ることが求められる。

## (3) 両校の管理職の方向性の一致と調整役としての中堅教員のリーダーシップ

研究を進める上で、両校管理職の方向性の一致が第一条件である。また、調整役を中堅教員が担うことで、結束して研究を円滑に進めることができる。中堅教員には長期的な目標を見据えながら教員集団をまとめていくリーダーシップが求められる。

## (4) 研究組織のスムーズな運営のための時間の確保

小中一貫教育の取組を継続していくために、できるだけ課題を焦点化していく必要がある。また、教員の人数が少ないことから、話し合いで決定されたことについては進んで自ら実践し検証することに努めるとともに、指導主事の助言を積極的に受けていきたい。

## (5) 新しい赴任者へのサポート体制

赴任者が気軽に相談し、思いを自由に発言できる雰囲気と、まわりの教員と赴任者との人間関係づくりが大切である。そのために、4月に赴任者研修会をもつなどの手立てを講じていきたい。

これらの課題を克服し、小中一貫教育を円滑に推進できる体制を作り推進していくためには、小中学校教員が人間関係を深める交流を進め、小中一貫教育の在り方や展望について論議を尽くしていくことが大切であると考えられる。また、学校としての主体性・自律性が問われる課題を克服していくためにも行政の全面的な支援を期待したい。

## 参考文献

- (1) 小中一貫教育基本構想検討委員会(2006)「宇治市における小中一貫教育の方向性」  
<http://www.uji.ed.jp/2006/matome17.pdf>
- (2) 神奈川県立総合教育センター(2006)「小中一貫校に関する研究」  
<http://kjd.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/shuuroku25/01.pdf#search='神奈川県立総合教育センター 小中一貫教育'>
- (3) 奈良市教育委員会(2006)「小中一貫教育特区NEWS」  
<http://www.city.nara.nara.jp/www/contents/1167279296177/files/tokkunews2.pdf>
- (4) 仙台市松森小学校 (2008)「国際理解教育」  
<http://www2.sendai-c.ed.jp/~matumori/kokusairikai.htm>
- (5) 西川 信廣 (2007)『習熟度別指導・小中一貫教育の理念と実践』ナカニシヤ出版  
p. 107. pp. 111-113.
- (6) 天笠 茂(2006)『公立小中で創る一貫教育4・3・2のカリキュラムが拓く新しい学び』  
ぎょうせい pp. 186-207.
- (7) 亀井浩明監修『小中一貫の学校づくり』(2007)教育出版pp. 31-34. pp. 37-40. pp. 119-120.
- (8) 善野 八千子(2007)『学校力・教師力を高める学校評価』明治図書 pp. 100-105.